

「地産地消ネットワーク」に参入

地域の活性化に貢献

株式会社 中田商事

三重県内はもとより、関西圏を中心に建築資材や各種部材を運送している株式会社中田商事（伊賀市荒木）。従業員70人、保有するトラック48台、売り上げは約7億円、いずれもリーマンショック当時のほぼ2倍の規模に成長している。



▲「地域に貢献したい」と語る中田社長

1995年に創業した中田純一社長（51）は、「地域の農産物を集荷し、流通への橋渡しを行う」「地産地消ネットワークだき、難しいけれど普通でなく、挑戦していく会社であり続けたい」と語る。昨年からは伊賀地域の活性化にも貢献で「意気込む。亀山」と意気込む。亀山は荷台に屋根のついた「ウイング車」という。平ボディは荷造りやシート張りの手間がかかり、そのためのドライバーの育成が必要なことから、各社とも手間のかからないうイング車に移行してきたという経緯がある。

けた顔の中田社長に聞いた。

平ボディの中田

同社の事業は貨物運送の他に、倉庫業、産廃の収集・運搬、自動車整備など。伊賀市と四日市市に営業拠点がある。運送業での同社の特色は、「平ボディ」といわれる、荷台のフラットな車両が多いこと。同業他社の大半は荷台に屋根のついた「ウイング車」という。平ボディは荷造りやシート張りの手間がかかり、そのためのドライバーの育成が必要なことから、各社とも手間のかからないうイング車に移行してきたという経緯がある。



▲大型トラックへの荷積み作業＝伊賀市荒木で

しかし、価格競争は激しくなっており、スポット受注ながら価格の安定している平ボディの需要が伸びているようだ。平ボディのメリットは、クレーン車を使って現場で荷積みができること。他の「クレーン車の扱いや荷造り、シート掛けなどにスキルが求められ、

優しい省燃費運転を表彰する「エコドライブ優秀賞」、更に三重県から「男女がいきいきと働いている企業」に認証されるなど、社外からの評価も高い。

労務管理のIT化を推進している情報管理室の藤森純子室長は若年層、女性、シルバー層などの人材を受け入れる環境も整備されてきました。現在女性ドライバーも3人働いています」と話す。

時間給を中心とした同社の優れた労務管理については、他社からも注目されているという。

ドライバーの腕の見せ所になっている点で、そこが大きな価値になっています。今では「平ボディの中田」と称されるようになっていっています」と中田社長。

若者、女性が働きやすい運送業では運転手の特殊な勤務体系が原因で、各社により賃金体系は大変複雑だ。同社は4年前、業界の主流である歩合制

や食堂などに配達するシステム。同社は伊賀地域の物流を受け持つ。「農産物や食品は鮮度や温度管理が非常に難しい、採算という面でも厳しい」という。昨年11月には、冷凍トラックを初めて購入した。

「伊賀の食材は米、酒、肉、漬物など全国的に自慢できるものが多い。小さな生産者を束ねて消費者とマッチングさせることで地域の活性化につながります。更に素材を加工し販売するところに関与できれば面白い」と語る。同社では「大山田温泉さるびの（伊賀市）に、地元産品を加工し販売する試験店舗も開いた。

同社は昨年12月から「地産地消ネットワークだべね」とみえ」に参加した。これは大王運輸（明和町）と百五経済研究所が進めてきた事業で、多くの小規模農家から農産物を集約し、消費者、小売店、レストランなどが加盟した地域商社組織から注文を受けると同時に、地域のスーパー

中田社長は、「私は突飛なことを考えてそれを実行するタイプ。しかし、今まで突飛なことや思っていたことも、いつかは普通のこと、当たり前のことになっていきます。運送というより物流という発想で、今後も夢のある会社にしていきたい」と語った。